



兼ちゃん。」

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(九) 豚の鳴き聲

「おら、大鳥のかみさんとこの夜の會なんか氣に留めてやしないよ。」と吉藏は、煙草の火を點けるのに新聞がみを細く折りながら言った。

「そんな事言つて、お前さん行くんだらう。」とお芳は勸め顔に言つた。

「おめい行きたいのか。」

「それアお前さん、私や始終外へ出てゐるひとぢやないから……」

「全くだ。ぢや行くとしよう。おめいが朝から晩まで家の中に居るツてことをおら時々忘れるんだ。それにお前は、この半月といふもの千代坊で随分苦勞したからな。是非行くとしよう。」

お芳は嬉しがつた。

「今朝ね、大鳥のおかみさんが、青い花瓶と、黄色い鸚鵡のついた海老茶の椅子被ひと、そのほか二品三品借りに來たときに、あの人ツてば「あんたは旦那さんと仲がよくてな



んて言つて、それから斯ういふのさ……

「フン！ 大鳥のかみさんはくだらねい事いふな。」と吉藏が避ると、

「くだらないお饒舌家だつて偶には眞實の事をいふよ。」とお芳は言つてから、これや、ちつと甘たるい事を言ひ過ぎたかと思つて急に世帯じみて、

「お前さんにシャツの良いのを拵へておいた。今日出来上つたばかり。」

「お、晴衣を着るツてわけか。」

「そうだよ。」

「立てカラぢやあるめい？。」

「そうだとも。上等のが着けるばかりになつてる。お前さんは立てカラを着けると氣が利いて見えるよ。アイロンをかけながらも、私を思つてたの。こんなに丁寧にしてあるのがお前さんに氣が付くか……」

「おめいは、おれをいつでも自分の思ふ通りにさせるな。大鳥の宅へ、千代坊の赤ネルの衣服で行けつておめいに言はれると、おらそうしねいちやならねい氣がするせ。」

「まさか！」とお芳は勝ち誇つた女のする笑ひ方をして「そろ／＼支度をした方がいゝね。」

「だけど、子供達は如何するんだ。」



「兼坊は連れて行くの。大鳥のおかみさんが連れてらつしやいッて言ふから。あの子を置いてゆくのは困るッて私が話したもんだから。」

「そいつは豪儀だ。」と吉藏まで大満足で、「あいつは會が好きだから。」

「どうか面目ないような事をしてくれなければいゝが。」

「あいつは良い子だぜ。千代坊はどうするんだ。」

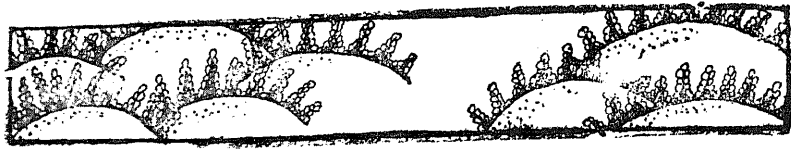
「坊やはぢき寐てしまふから、私達が戻つて来るまで濱野のおかみさんに居てもらふ事にしてある。」

「何もかも道具立てが出来てるのか。」と好人物らしく吉藏は答へて、「もしおらが行かないつて言つたらおめいどうする氣だつた。」

「だつてお前さんが行くの分つてるもの。……お前さん階下へいつて兼公を呼んで来て下さいな。大方初ちやんと遊んでるんだらう。」

x x x x x x

夜になつて親子三人大鳥の宅へ出かけて行つた。大鳥のおかみさんといふのはお芳がよく噂をする通りに「可愛さうに、家にたいした道具がないくせに、それア、お客をするのが好きな人」だつた。この人は、自分の持つてゐない裝飾品を借りまはる事が平氣だから

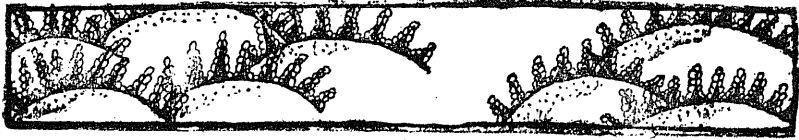


會の時にはその客間はでこ／＼に飾り付けられてゐる。たゞ自分の夫には始末に困るのだ。大鳥のおやぢはバン屋なのだが、お客をする晩には宵の口から臺所のベッドに退却してしまつて、そこで大軒をかくことといつたら客間に居る人達にはつきり聞こえる程だつた。おかみさんはいろ／＼工夫をして、一度などは、洗濯物挟みでおやぢの鼻をつまんで置いて見たが、一向効力が無かつた。おやぢは、はじめは大人しく洗濯物挟みではさまれてゐたがやがて、うなされたやうになつて、半分寐ぼけて誰だかおれの呼吸を止めようとするツて、壁をドシ／＼叩いて氣味わるい聲ではめき立てるのたつた。

こんな事があつてからは、軒をかくまゝにさせてあつた。そして、おかみさんは譯を知らない御客に、一々説明することにしてゐた。

吉藏とお芳とが來るとすぐ、大鳥のおかみは話してきかせた。二人は一番遅れて來た客だつた。先着の六人は客間の壁に沿ふて席を取つて談話をすこししたり飾り付けを長く眺めたりしてゐた。窓際に居た小柄の女などは、飾り物が多いのとその色のあでやかなのですつかりすつみこんでしまつたらしかつた。

兼ちゃんは膝蒲團を懸掛代りにあてがはれて、母親の足許にゐたが、「母ちゃん、あそこの青い花瓶はうちのによく似てゐるね。」



「黙つておいで……奥さん今のお話では……」

「母ちゃん、黄色い鸚鵡のゐる椅子被ひがあそこに……」

「兼ちゃん、黙つて！」と母親は恐い顔をして見せた。

「怜愍な子ですね。」と大鳥のおかみは感心した。この人は、こんな事をいはれても別に氣を悪くしなかつた。客間に光彩を添へてゐる物品のうちで、お客達が銘々の所有品だけを認る分にはかまはないと思つてゐた。

「あつちへ行つてお父ちゃんの傍においで。」とお芳は言つて吉藏に「お前さんこの子を見てゐて下さいよ。」と頼んだ。

兼公は膝蒲團を二人のお客の足向ふへ投つておいて父親の傍に蹲まつた。大人達……しかも多數が中年者……の中なのでこの子は何だか工合がわるかつた。それに父親が窮屈さうにむつがしい顔をしてゐるのが氣になつた。

退屈な三十分が経つて、いよ／＼この子は黙つて居られなくなつた。

「お父ちゃん。」と彼は言ひ出した。吉藏は堀井のおかみさんが自分の夫の兀頭の話を長々とやつてゐるのを神妙に聽いてゐた。「お父ちゃん。あの音なに。」

「ありや、なんでもないよ。」と父親は大鳥のおやちの躰だと氣付いたので



「たゞ 音さ。」と答へた。

「大きな豚みたいだね、お父ちゃん。」

「シ！ 今、何か言つちやいけない。」

「あたゐ 大きな豚が……」

「このお子は何をいつてるの。」と堀井のおかみさんが優しい笑顔をしたので、兼公はすぐさま友達になつたような氣になつて

「豚だよ。」と親密らしく説明して「そら、聞こえるだらう。」

堀井のおかみさんは笑つて兼公の頭を撫でた。「いゝ子だからね。今そんな豚なんていふのお止し、さ、お菓子を一つ進ませよう。」

兼公はお菓子を口へ入れ、膝蒲團をこゝろもち堀井のおかみさんの方へ寄せて「小母ちゃん、ありがとう。」と嗔れ聲でいつた。斯うやつて二人は長い事仲よくしてゐたから、吉藏もすいぶん助かつた氣がした。

九時半ごろにお客は座れるかぎり楕圓形のテーブルに就いて、女主人が取り分けてくれる軽いお馳走をたべた。兼公は、母親の目くばせを見ぬふりをし、肝油といふいやな薬が世の中にある事も忘れて、饅頭をしたゝか食べた上に、ラムネを二瓶とあけてしまつた。



お馳走が終つて椅子がもとの通り壁際へ戻されると兼公は、

「おもしろい會だね。お父ちゃん。もうおうちへ歸るの。」

吉藏がそれに答へないうちに、主人役が、これから石川さんに獨唱を願ふからと口上を述べた。誰もくが、隅に居る中年の大柄の男の方を見た。その男はしきりに額を拭いてそはくしてゐた。

「さあ、さあ、石川さん。」と大鳥のおかみさんは勢をつけるやうに「何でも御氣に入りの歌を一つ。御心配ありませんよ。こゝに居る方はその方面の方でないから。」

「さあ、おやりなさい、石川さん。」と數名拍手しながら勧めた。

「あの人 喜劇の人？」と兼公が尋ねた。

「黙つて！」あぶないと見てお芳は子供を制しながら、自分の傍に座つてゐる夫をも肱で押した。

石川さんは、一インチ程椅子をすり出して眼を天井に据えて、ド、ミ、ソ、ド、ソ、ド、ミと小聲に鼻でやつた。

誰だかくすく笑つた。吉藏は兼坊の口を手で、きつくなく併し斷乎として押へて居た。「今調子を合せてゐるツてなわけですよ。」と石川の妻君がいつた。この人こそこの宅の



客間の裝飾品に居すくめられてしまつた人だつた。

「宅は調子が中々見付からない人ですが、その中にちやんとしますよ。」

かういふ間にも、石川さんはド、ミ、ソド、ソ、ミを相かはらずやつてゐるので、兼公は可笑しがつてく／＼蒲團の上で身を揺りながら、それでも餘儀なく黙つてゐた。

やつと、石川さんは小唄を一つはじめたが第一節せつを半分ほど唱ふと、もすこし低い調子に下げなければならなくなつた。

「いつもあれなんですよ。」と妻君が辯解して「ちやんと調子が出ると相應によく唱ふんです……もつとも言句を忘れさへしなればね……あなた調子をとれましたか。」

「今、うまくいきさうだつたのに、お前がいけなくしてしまつた。その内うまくいくならう。」と石川さんは決然として答へた。なるほど調子が取れて一曲きかせてくれたが、その聲はこんな大きな男にしては、びつくりする程ちいさかつた。

兼ちやんには欺されたような氣がして、腹を立てないまでも、とにかく非常に詰らなく思つた。その内に眠氣がさして來たので父親に抱かれてすやく／＼と眠つてしまつた。幾人かのお客がかる／＼唱つた……もつとも石川さんのくやうに骨の折れたのではないが……その間中この子は寐てゐた。



お芳と吉藏は、今夜は兼坊がおとなしくて幸だと悦んでゐた。堀井のおかみさんと今一人の婦人客は、こんなよい男兒を持つてお仕合せだと賞めてくれたりした。その途端に兼公は目を覺して眼をこすり／＼あたりを眺めた。

「可哀さうに、この子は眠くてたまらないんですよ。」と堀井の妻君がいふ。

「ほんとにね。くたびれたの坊や、」と今一人が相づちを打つ。

「こんなにお行儀のいゝ子はめつたにありませんよ。」と大鳥のおかみがいつた。

石川の細君は何ともいはないで苦笑してゐた。この子が石川さんの事を喜劇俳優だといつたのがまだ癢に觸つてゐたのだらう。

「もうおうちにかへりませう、兼ちゃん。」とお芳がいつた。

兼公は今までの自分についての批評を耳に入れてないで、寐ぼけ眼で何かに聽き入つてゐたが、

「やア、きこえる。きこえる。」とつぶやいた。

「まだ半分眠つてるンですよ。」と大鳥のおかみさんが

「何がきこえるの エ。」堀井のおかみさんが、

兼ちゃんはまだ眼をこすつて、



「きこえる……家の中に居らア！ お家ン中だ！ 大きな豚見に連れてつてよ、お父ちやん。」

暫時は誰も黙つてゐたが、みんな笑ひ出してしまつた。氣の毒な！ 大鳥のおかみさんも顔を赤らめながら仕方なく一所に笑つたが、あくる日堀井の妻君がよその人に話した通り、全く當惑したらしかつた。

お芳は、あわてゝ訛言をいつて暇乞をし、夫をせき立てゝそこを出た。そして自分の家へ着くまで一言も口をきかなかつた。千代坊を見てゐてくれた濱野のかみさんが歸つてしまふとお芳は三分通り眠つてゐる兼公を無造作に床に入れ、それから椅子に仆れるやうに腰を下して、夫をつく／＼と見てゐた。

「さて」、としまひに彼女は言ひ出した。

「さて、どうした。」と吉藏は機嫌よくしようとして「夜の會へ行つて來たな。」

「もう懲り懲り／＼だ！」

「何だつてさ！」

「だつておまいさん。私や今までだつて面目ない思をした事はあるが、今夜のような目に遇つた事はない。兼公……」



「あいつに罪はありやしねい。大鳥のおやぢの事をいつて聞かせて置けばよかつたんだ。お前さんは、兼公の肩をもつて、……どうせ私なんかどうでもいゝんだから。」

「何いつてるんだ!。」

吉藏は起ち上つて妻の傍へ行つて、「おめいもかわいい、困つた奴さ。」

「そんなおべんちやらにのるもんか。」

吉藏は何も言はずにさまざまお機嫌とりの方法を講して結局うまく成功した。お芳はふとい歎息をついて、夫を見て微笑した。

「だけど、あの子をどうしやうね。」

「どうもしようがねいや。」

急に二人は笑ひ出してしまつた。

